

# 異世界忍者無双

～俺の異世界転生特典がどう見ても万能忍者スキルだったので超絶に忍びます～

甘味亭太丸

---



ファンタジア文庫

2880

異世界忍者惣奴

目次 [contents]

序の段	耐え忍ぶ者	〇〇五
壱の段	忍者転生	〇一一
弐の段	忍者乱舞	〇六五
参の段	魔王襲来	二一九
終の段	自由なる日々	三〇六
あとがき		三一三

口絵・本文イラスト  
カット



ISEKAI  
PIPIJA MUSO  
Isekai de Ninja ga Tsuyoi.

## 序の段 耐え忍ぶ者

大人の付き合いというものはかくも面倒めんどうなものだ。

「どうした城戸きど、飲んでないじゃないか」

まだ半分以上も残った大ジョッキにビールが足しこまれる。

半笑いを浮かべながら俺はビールを注ぎ足してきた上司の顔を見た。赤ら顔で目が若干しやっかん虚ろ、典型的な酔っ払いのオヤジだ。

「今日は無礼講だ、飲めのめ！」

「いただきます……」

上司が注いでくださった酒は絶対に飲み干す。それを拒否きまひすることはできない。

一体何世紀前の掟おきてだと思いたいが、うちの会社、特に上役どもはこのノリが大好きだった。

飲み干さなきゃ仕事中にぐちぐち言われるのは目に見えていた。

だから、俺は一気に飲み干す。

「ごちそうさまです」

と言った矢先にまたビールが注がれる。これで三回目だ。

「いいぞ！ 社会人のいいところを見せてやれ！」

「ははは！ 城戸君、やるじゃないか！」

（くたばれ、ジジイども）

半笑いを浮かべながらも、俺は内心で毒を吐く。

四月は春、花の新社会人たち及び新入社員を迎える歓迎会の席。なにを思ったかうちの会社は花見の席なんぞを用意してきた。

昼間から酒を飲んでも問題のない環境とでも言いたいのかもしれないが、このバカ騒ぎのせいで周りの視線が痛いことになってるのに気が付いてないのだろうか。

歓迎すべき新入社員たちもドン引きしている。

（はあ……まあ、俺が酒を引き受けとけば新入社員がつぶれることはねーか）

こんな前時代的なアルハラから生まれたての子馬のような若者を守るのは先輩の務めだ。俺が入社した時は誰も助けてはくれなかったがな。

（はあ……恨むぜ、馬鹿親ども）

上司どもの絡み酒を受けながら、俺はこの二十九年間を振り返る。

親の言う通りに勉強して、親の言う通りの学校に入って、親の言う通りにこの会社に入った。

そうしたらこのありさまだ。曰くこの会社は地元でも有名だからきつといい会社だということで俺は押し切られた。

うちの会社はいわゆるブラック企業ではない……と思う。

ちよっと上司が偉そうで、口だけで、指示を仰げば文句しか飛んでこないし、絶賛アルハラを受けてるが、多分ブラックじゃない。だってブラック企業認定されてないからな。

とにかく、どこにでもあるような普通の会社だ。泣けてくるね。

（給料はいいさ、給料はな。それ以外は最悪なんだよこは）

うちの両親はとにかく古い人間で、人間が生きていく上で必要なのは学力と安定した給料。

それ以外の娯楽は全くの不必要と切って捨てるタイプだった。

ああ確かに。全く以てその通り。一分の隙もない完璧な人生設計だと思うさ。

まるで自由のない機械みたいな人生でへどが出るがな。

（わかつちやいたんだがな）

俺はもつと自由に、自分の人生を歩みたかった。

ならそうすればいいだろとはよく言われる。うだうだ言つてないで、大人なんだから自分のしたいことを主張すればいいって、それは正論だし、俺もそう思う。

だが、俺ができたのはせいぜい親に隠れてアニメやゲームに手を出す程度だった。ひそかな楽しみではあったし、どこか俺もそれで妥協していた。その楽しみがあれば我慢できると思っていた。

一度ずると続くと人間って不思議なもので、動けないものなのだ。

諦めがついてしまふともいう。どうせ何も変わらないと卑屈になつてしまふわけだ。なにより、俺はもう二十九だ。来年には三十だ。そこまでやれるほどの意欲はない。

せめて、何か大きなきっかけがないと俺には無理だ。

「そうだ、城戸君！ 君確か木登りが得意だったそうじゃないか！

「え？」

唐突な無茶ブリに俺は思わず酒を噴き出した。

なんだ、急に。木登り？ 別に得意じゃないんだが。

「え、いや、自分、そこまで……」

「得意だったじゃないか、ええ？ ほら、先輩の凄いとところを見せてあげなきゃ！」

「や、ちよつと……！ 不味いですって、そういうの禁止……」

「城戸君、僕たちが若い頃はね、なんでもやってきたんだよ。そうして社会スキルを身に付けてきたんだから」

聞いたこともない理論だ。

「城戸君」

上司が明らかに声音を低くして、脅してくる。

くそ、ここで断ると新入社員たちに被害が出るかもしれないねえ。

「あーはいはい！ そうですよ、よくご存じでしたね！ 不肖、この城戸音羽、若い頃は忍者に憧れ、木登りマスターとも呼ばれた男です！ ではお見せしましょう、忍法木登り！」

ええい、破れかぶれだ。

俺は上着を脱ぎ捨て、桜の木へとびかかる。意外とつかむところがあつて、登りやすい木だ。これなら、なんとか行けるかもしれない。

「はっはっは！ 拙者の腕前はいかが——」

その瞬間、ふっと俺は腕の力が抜けるのを感じた。

思った以上にアルコールが全身に回っていたらしい。

「あ、やば」

落ちていく瞬間は妙に冷静だった。  
 なぜか周囲がスローモーションのように見えていく。  
 そして、俺は……。

## 巻の段 忍者転生

「そんなんだからあんたたち三重県人は名古屋人に名産品取られるのよ！ もっと欲を持ちなさい、欲を！」

目が覚めたら、いきなりだが、俺は正座姿で女神を自称するノースリーブミニスカ姿の黒髪ポニテ美少女に説教を受けていた。

城戸音羽、二十九歳。三重県は四日市の出身。それが俺だ。三十じゃないんだからまだおっさんではないと思っっている。

それはさておいて、突然何を言い出すんだコイツと思われるかもしれないが、俺はどうやら死んでしまったらしい。

(……なんだ、頭がぼーっとするな……死んだ、んだよな?)

どーにも死ぬ前の記憶があやふやで記憶にないのだが、目が覚めたら真っ白な空間に一畳間がふよふよと浮かんでいる場所で正座をしていた。

そしたらポニテ女神様が「あなたは死にました」と言うので死んだらしい。

死ねばその魂は天に召されるはずなのだが、その前に女神様がキャッチして今に至ると  
いうわけだ。

「天むすもひつまぶしも味噌カツもぜえええんぶ三重県発祥だつてえのにあんたら三重県  
人がのんびりとしててろくにアピールもしないもんだから全部名古屋名物にされちゃつて  
るじゃない！ 最近じゃトントンテキまで名古屋名物とか言い出してるわよ！ 三重県担当女  
神の私の目の黒い内はトンテキだけは死守させてもらおうわよ！」

死んでしまった理由はさておき、俺はどういうわけか女神様に気に入られて、特別に異  
世界転生させてもらえるのだというのだ。

何でも名前が気に入ったらしい。

しかも特典付きでだ。この手の展開は大体理解はできるが、まさか自分の身に降りかか  
るとは思わなかった。

しかしだ。女神様からそんな感じの説明を受けていた俺だったが、提示された特典内容  
にちよっと突っ込んだ。

いや、悪い内容じゃないと思う。

ただ、非常に偏っているというか、なんとというか、えらく女神様の趣味満載のような、  
そんな特典だったのだ。



それについて突っ込んだら、どうにも駄目だったらしく、最近の日本人はやる気がないから始まり、なぜか今では名古屋ディスプレイになつていてというわけだ。

「いや、言わんとすることはわかるけどもさ……」

まあ名古屋名物の大半は名古屋発祥じゃないってのは、聞いたことがあるが、それを俺に言われても困るというか、そういうのは知事とか市長とかに言ってもらわないと。

それか観光アピール大使とか呼んでさ？

「というか、さっきちらっと三重県担当女神とか言ってたけど、それってどういう意味？」

まさかあと四十六人もこんな女神様がいるのか？

それ考えるとなんか騒々しいな。

「三重県で神様っていう色々いるけど……まさか、君はアマテ……」

四十七都道府県の中でも比較的マイナーなところに位置する三重県で重要な名所といえ、そう伊勢神宮だ。

そこに祀られている神様といえは、なあ？

だけでも俺の言葉を遮るように女神様は手をかざして首を横に振った。

「違うわよ。アマテラス様と一緒だなんて畏れ多いこと言わないで頂戴。あの方は日本全

土の神様だし。私はあれよ、西洋風に言えば天使、エンジェルよ。一応女神ってことになつてるけど。私はこの三重県を担当しているわ」

なんかよくわからない組織図。

聞いても理解できなそうだから無視するが。

「お察しの通り、日本の四十七都道府県にそれぞれ担当となる女神がいるわ。沖繩なんかは男だけど、ま、いいわ。とにかく！ あんたの異世界転生特典はこれで決まり！ これしか認めません！ いいですね！」

そう言つて女神様は時代劇なんかに出てくる巻物を俺に押し付けてくる。  
触った感触はなんの変哲もない紙だ。

「貰えるなら貰いますけど、これ本当に役に立つんですか？」

「その点はお心配なく。人間が想像するようなことは一通り可能だから。というかこれくらいできなきゃ駄目でしょ。何言つてんの？」

「いやでもなあ……これは……」

俺は受け取った巻物を広げてみた。そこには達筆な筆文字で書かれた文章があり、その内容こそが俺に与えられる特典なのだという。

特典内容その一、肉体強化。これはシンプルだ。特典内容その二、神通力。ちなみにすぐ横に魔力とかつこ書きされている。これもシンプルでわかりやすい。

二つとも『特』という字が丸記号で囲ってある。女神様曰くこれは「特上、特別って意味よ。つまりSランクとかEXランクとかそんなもん」とのこと。

この辺りはまだいいだろう。お約束と言ってしまえばそれまでだからな。だが、問題なのはここからだ。

技能という欄がある。またしてもかつこ書きでスキルと書かれていた。

かなりの量が羅列されている。

「ええと、まず最初が……分身」

「必須でしょ。むしろできない方がおかしいわね」

「んで、水蜘蛛？」

「これも基本ね。水の上を歩けるわ。ま、神通力を使えば何とでもなるけど一応ね？」

「空蟬」

「敵の攻撃を避ける時に使うとかつこいいいわね。変わり身とは違うからね？」

「……影縫い」

「敵の動きを止められるわ。こう、シュツとやるのよ」

「色々すつ飛ばして……最後に五遁」

「属性技だって使えなきや話にならないじゃん！」

さて、ここまで言えはもうわかるだろう。

「忍者だ、これ」

そうなのだ。俺に与えられる特典とはまさしく『忍者』なのだ！

\*\*\*\*\*

「おめでとうございます。あなたの異世界転生特典は忍者です」なんて提示されて突っ込まない奴がいるだろうか？ いやいなね。

そういうわけで、俺が「なんで忍者？」と突っ込んだら、女神様に怒られたというわけだ。

「そんなの決まってるじゃない！ 忍者こそが最高にかつこいい存在だからよ！ そしてあなたは三重県人なのよ！ 忍者に憧れないでーするのよ！ 三重県は忍者の里でしょ

うが！」

ということらしい。

いやそもそも三重県は忍者だけで構築された都市じゃないんだけども。「いい？ 私はね、三重県担当女神としてじゃなく、個人的にも三重が大好きなの。歴史もあるし、名産も多いし、忍者もいるし」

「忍者は創作ですけど」

まあ歴史があるってのはその通りかも。なんだかんだ名所も多いしな。それでもなんでかマイナーだけど。

「そこ、うるさい。とにかく、忍者伝説が数多く残るロマンの都市よ。だって言うのに、あんたら三重県人はのんきなのか欲がないのか、それともプライドがないのか。歴史はアピールしないし、特に重要な都市でもないとか言われるし、名産品は愛知・名古屋にとられるし。というかね、名古屋はどうとう忍者まで自分たちのものアピールしてきてるからね！」

この女神様、いくら担当だからって三重愛が重たいな。三重県人の俺から見てもちょっと偏屈へんくつすぎるだろうに。

そして愛知と名古屋への異様なヘイトは何なんだ。

「あの、なんでそんな名古屋嫌きらいなん？」

いいじゃん名古屋。

「あつたりまえじゃん！ あの愛知担当しやうたんの性悪女神め、自分たちが使つてやる方がアピールできるとか言い出すのよ！ 許せるわけじゃないじゃない！」

愛知県担当女神か……というか女神様同士でそんないさかいあるのかよ。

別にいいじゃないか、それぐらい。どこで宣伝されようとかさ。

しかしながら女神様はそれがことのほか許せないらしく、かれこれ一時間近くこの話で俺は説教を受けている。

そりゃ別に、忍者は嫌きらいじゃない。子どもの頃ころは忍者ごっこもしてたし。

ああ、思い出すと懐かしいな。親の言う通りに勉強してた俺だが、学校では友人たちとそうやって遊んでいたっけ。示し合わせたわけじゃないが、お気に入りだったのは忍者ごっこだなあ。

時代劇ドラマなんかでも忍者が出てくるとちよつとうれしかったし。

「第一、忍者の里、三重の人間なら自分の名前の意味をもう少し理解しなさい」  
なんて幼少時代を思い出していると、女神様がぴしゃりと言い放つ。

「俺の名前え？」

二度目の自己紹介だが、俺の名は城戸音羽だ。

「おとわ」って読むせいかな、なんか女の子みたいな名前です昔はからかわれたなあ。

「はああああ……」

「すつげえため息をつかれた。

珍しい名前だとは思いますが、なんか忍者に関係あるのか？」

「いーい？ 忍者で城戸といえば城戸弥左衛門。あの織田信長を狙撃したスナイパー忍者よ？」

「さも当然のようにおっしゃりますが、知りません」

歴史の教科書にいたっけかなあ？

生憎、俺、歴史はそこまで詳しくないんだよ。

「そして音羽はその城戸弥左衛門の通称『音羽の城戸』でもあるし、彼が仕えた忍者、音羽半六の名前でもあるのよ？」

「へえすごい！ でも知らない！」

だって忍者っていえば服部半蔵とか猿飛佐助とか霧隠才蔵とかじゃん？

他の忍者って言われても……松尾芭蕉とか？

「ところで、その織田信長を狙撃した忍者の名前が俺の名前と同じってことはあれです

か？ 俺は実はそのどっちかの子孫とかそういう？」

「あ、それは違います。全くこれっぽっちも血筋は関係ないです。偶然の一致。ただこう、名前がびつたりだったので。あとなんとなく忍者っぽいことしてたので」

「……はあ？」

忍者っぽいこと？

死ぬ前の俺、何やってたんだ？ いやそもそも俺、普通のサラリーマンだぞ？

「ええと、記憶が混乱しているようですね」

女神様はどこから取り出したのか巻物を広げる。

「あつた、あつた。ええと、あなたの死因ですが、木登りをしていて足を滑らせて転落死。はい。お酒に酔って、木から落ちてポックリですね」

「……はい？」

なに、その、ものすごく恥ずかしい死因。

「いや、待てよ……ああなんか思い出してきた……」

そうだ、花見で上司の無茶ブりに付き合わされて……。

二十九年間、周りの言うことを聞いて真面目に生きてきたつもりだったが、まさかそんなくだらない最期を迎えたなんて……そういえばこの空間で目が覚めたときに頭がぼーっ

としたのはそれが原因か……なんとも間抜けすぎる。

「ダメですよー嫌いなものは嫌ってちゃんと言わなきゃ」

言い返せない。全く以てその通りすぎる。正論だ。それが通らないのが会社つてところだ。

だが、これはお笑いだな。周りの言うことを聞いたあげくがこれか……哀れだな、俺。

自由が欲しいなんて言っておいて、自分から遠ざかってしまつては話にならん。

「で、す、が、私はあなたのその行動に一つの可能性を見たのよ」

落ち込む俺のことなんぞ知ったこっちゃないという具合に女神様は話を続けている。

なんでもいいが、酒の失敗から可能性を見出すとかすげーなおい。

「酒とは本能を掻き乱すものよ。そしてあなたは本能の越くまま忍者の真似をした。それつつまり、あなたの内側に眠る忍者スピリットがそうさせたつてわけよ！」

なんだよ忍者スピリットつて。酔つたら忍者になるのかよ、俺は。

「その暴論やめて。ものすごく恥ずかしいから」

酔つ払いの中年が忍者ごっこしてたなんて、恥ずかしいわ！

「でも残念。あなたは死んだわ。だつて、あなたは忍者じゃなかったから。忍者だつたら死ぬこともなかったわ。むしろ拍手喝采よ」

忍者トークに盛り上がつているところ悪いけど、俺の心は砕けそうだよ。

「とにかくもう時間がないわ！ あなたは忍者として異世界に降り立つのよ！ さあ行きなさい、三重県発祥の忍者こそが最強であると証明するために！ あの性悪女神の鼻を明かすために！ 私の忍者欲を満たすために！」

おい、なんか最後あたり私欲が混ざつてたぞ。

と、突つ込もうとした瞬間、女神様はいつの間にか垂れ下がっていた縄を引っ張る。

「え？」

すると、俺が正座していた場所がかぼつと開く。

忍者屋敷かこの空間は？

「うおおおおお!!」

「何かわからないことがあつたら巻物を読んでねえ」

そして、俺は、闇の中へと落ちていく。

落ちたと思った瞬間、俺は重力というか空気を感じた。

肌に直接降りかかるのは、どことなく暖かな感触だ。

「こ、これは！」

同時に俺は自分が着ていた服が別のものへと変化していることに気が付く。

いつの間にか俺は真っ黒な忍者装束をまとっていた。しかも頭は目元だけが開いた頭巾をかぶっている。背中には忍者刀の感触、多分だが衣裳の下には鎖帷子も着込んでいる。

「忍者だ、これ！」

間違いないこの姿はジャパニーズ・ニンジャ・スタイル。

って、冷静になっただけじゃない。問題なのは、俺が送り込まれた場所が空の上ということだ。

「って、落ちてるうううう！」

真下は森、針葉樹でもそこまですとがってないだろうと言わんばかりの槍みたいな木々が生い茂る深い森だ。

時刻は夜、しかし満月と星のおかげで結構明るい……ってのんきに見渡してる場合じゃねえ！

「ま、また転落死は嫌だぞ！　なんか、なんかねえか？」

はっ、そうだ！　あの女神様は巻物を読めとか言っていた！

俺は落下しながらも懐をまさぐる。あつた、あの巻物だ。

その間にも俺はぐんぐんと落ちていく。

ああ、ヤバイヤバイ、急げ！

「空、空、空！　あつたこれだ！」

巻物に記された技能にあつた。空を飛ぶ為の術！

「う、お？」

その欄を読んだ瞬間、まるで記憶が刷り込まれるように俺は術の使い方を知り始めた。俺は勢いよく体を大の字に広げる。その瞬間、俺の身の丈はあろうかという巨大な術が背中に展開された。

「大風飛行術……なんか、テレビで見たことある……それを俺、やってる……！」

昔の特撮もので忍者がこうして空を飛んでるシーンがあつたよな。

なんかちよつと、感動。

そのまま滑空するような感じで空を舞う俺。

「これが、異世界？　こんなところで忍者をしろって……いくら何でも放任過ぎやしないか？」

とにかく今は落ち着ける場所を探そう。  
ところでこれ、どうやって降りるんだ？

\*\*\*\*\*

「なんて都合のいい……」

大風飛行の術とやらに關して俺は勘違いをしていた。というより、この術の詳細が俺の頭にインプットされ続けているのだ。

この術、名前こそは風だが風を受けて浮かんでいるのではなく、殆ど俺の意思通りに動いているって言うのだからますます都合がいい。

「思念操作ってやつか……まあそっちの方がありがたいか？」

なので、徐々に高度を下げ、速度を落とすことで安全に着陸できるというわけだ。

着陸すると同時に背中に展開していた大風が一瞬で折りたたまれ、どこかへと収納されていく。

「おお……なんかカッコイイ」

明らかに物理現象を無視した収納方法。

まるでヒーロースーツみたいだ。

「でもどこにしまったんだ？」

さつきまで感じていた大風の感触も重みもすつかりなくなっている。

背中に手をまわしてみるのが、何か収納するようなものはない。

気にはなるが、それよりこの場所がどういった所なのかを知りたい。

森、とおおざっぱにわかるのはその程度、空にいたときにそれとなく周囲を見渡してみたら光源はなかった。

さらに遠くは妙に視界が広がっていて、もしかしたら海でもあるのかもしれない。

「人が住んでそうな場所は見当たらない」

しかし、俺が降りたのは森の中でも比較的開けた場所、恐らくは人通りのある街道と見つけたところか。

道なりに進めばどこかにたどり着くだろうが、果たしてどれだけ進めばいいのやら。

目視できる範囲で光がなかったとみると相当深い森なのかもしれない。

「何か都合のいい術はないものか……」

困ったときの巻物だ。

「……ん？」

何気なく取り出したが、この巻物けっこうな大きさがある。二十センチちょっと、サラサラと滑る感じが懐に入ってるものなのかな？

「これも何かの術か？」

巻物をさっと広げてみる。

すると俺はもう一つの事実が気が付いた。

この巻物、ただの巻物じゃねえ。

質感はまさしく紙なのだが、書かれている文字がスクロールされ、画面が移り変わる。そこに書かれているのは全て忍術などだった。

「巻物型タブレットって言えばいいのか？　なんか急にハイテクになったな」

それでちよつとニクイ演出なのが、新たに現れた文字はうごめくようにして形を整える。操作方法はハイテクなのにこの辺りの演出はなんかまさしく魔法、というよりは和風な呪術って感じがする。

何だろう、俺、ちよつとこの巻物好きかも。

「んで、さつきから巻物取り出せたり風が消えたりするのはなんでだ？」  
紙の表面というか画面をスクロール。すると気になる項目を発見した。

「ええと何々、影隠の術？」

この忍法は本来の使い方はあらゆる影にその身を隠すものである。応用として道具を忍ばせることも可能。影の大きさ、形は問わない。

と、されている。

「つまり、俺の忍者装束の影に道具がしまつてあるのか……一体どんだけの道具があるんだ？」

俺はおもむろに懐をまさぐってみる。

すると……忍者基本装備のクナイ、よくみる十字型の手裏剣に棒手裏剣、まきびし、かぎ爪、鎖鎌、分銅付きの縄、あとなぜか弓矢と出るわ、出るわ、道具の数々。たぶん、これもつと入ってるな。

一度、どこかで道具の確認もしないといかんが、一通りの武器がそろっていると考えればちよつとは安心か？

「いや待てよ、そもそも俺、忍法どころか体術なんて習ってねえぞ」

勉強を効率よくするにはスポーツも必要だと親が言うので、中学の頃に剣道を少しかじっていたが、それぐらいなものだ。高校、大学で弓道も習ったがそこまで本気ではやってなかった。一応、基本の型ぐらいは覚えていたが試合に出ても二回戦負けが殆どだった

ぞ？

「そういえば女神様は身体強化とかもしてくれたはずなんだよ……」

ええい困った時の巻物！

あつたあ！ 肉体の項目！

「何々、身体能力は特」

丸記号で特がかこつてある。確か特上って意味だが、それはあの時見た。

んで他に何か……書いてないわ。

「わかるか！」

思わず叫ぶ。

と、とにかくすごいんだろうが、もっと具体的に教えろよな！

「ん？ いや、何か文字が追加されていく」

俺の悲痛な叫びに巻物が応えてくれたのか、なんかしぶしぶといった感じで文字が増え

ていく。

「さすがハイテク巻物だ。忍的剣術と忍的体術……」

例の如く丸記号に特。

「いやだからわかるわけ……いや、わかるわ」

不思議な感じだがその項目を読んだ瞬間、まるで眠っていた頭が目覚めるように俺は俺に与えられた特典というものを理解していく。

「巻物を読むことで技能がアンロックされるってわけか？ なんでまたそんな手間のかか

……いや、むしろ都合がいいのか？」

忍者たるもの巻物を読むべし。

なんかあの女神様ならそれぐらいは当然と思つてそうだな。

他にもいくつか忍法を確認するとやはり同じだ。その術がどのような効果を發揮するの

かが理解できる。

やっぱこの巻物、面白い。術以外にも薬草や火薬の知識も入ってくるし、武器の手入れ

なんかもわかってくる。なんか外付けのメモリを追加されている感じが、違和感がなく

なると当然のように思えてくる。

だが逆に理解することで不都合もわかってくる。

というのも、最低限の武器はあるが、それ以外の道具、例えばだが鉄そのものや薬草そ

のもの、火薬そのものは現地調達せねばならないということだ。

それにかまどもないし、それ専用の道具もない。

「しばらくは体術でしのげることか？ あとは色々調達しないといけないが……」

それより、なんか無性に腹が減ってきた。

「そういえば巻物に保存食の項目が……あったわ兵糧丸」

実際に見たことはないが、名前だけは聞いたことのある兵糧丸。一つ喰えば疲れ知らずといわれる兵糧丸。しかも今なら五つだけ影にしまつてあると書かれてる兵糧丸。ついでにレシビもあるぜ。

「た、食べてみるか?」

というところで懐から取り出す兵糧丸。一口サイズの茶褐色の団子だ。なんか妙に甘つたるい二オイがする。

しかし腹が減つてはなんとやらというし、俺は思い切つて口の中に放り込む。

すると、妙に硬いが噛めないほどではない食感と共に流れ出る味は……。

「まっず」

めっちゃまずい。なんかもう体にいいものをたくさんぶち込みました感のある苦みとそれを中和しようとする蜂蜜らしき甘味の味が絶妙に混ざり合いついでにねちゃねちゃと変化する食感のせいでさらにまずい。

一番むかつくのが吐き出すほどのまずさじゃないってところだ。

「やっぱ食い物も探さないと……せつかく手に入れた知識だし、実地訓練もかねて菓草

とか動物とか探すのもいいかもしれないが」

何とか飲み込むが口の中が今でもねっとりする。

早く水かなんかで流し込みたい。

「水遁の術で水出せないかな……」

五遁の項目を探して水遁を確認すると、当然のように忍法を理解する。

なんだかこれはこれで胡散臭い感じもするが、ものは試しだ。

「……こう、か?」

俺は手で印を結ぶように構える。

「水遁・水柱!」

その瞬間、印を結んでいる俺の手からとめどなく水が放出される。

「すげえ……!」

ヤバい、なんか感動が止まらない。俺、忍法使つてるよ。

水遁の術。その名のごとく、水に関する忍法の総称だ。インストールされた知識による

と、この忍法で用いる水はそのほとんどが空気中の水分を集めるものだという。もちろん、近場に水辺があればさらに容易な発動が可能だが、いわゆる特上の俺は水が近くになくとも、水を出現させることはなんてことない。というものらしいのだ。

「でも、この水……飲めるのか？」

空気中の水分であつさり言うけど、それってなんか、こう……抵抗がある。

でも口の中はねっちょり。

……ええい、ままよ！

\*\*\*\*\*

水遁の水はなんか普通でした。とにかく口のねっちょり感も消えだし、ついでに喉もうるおせだし、さっそく行動開始だ。

「とは言うものの……」

土地感がなさ過ぎてな。

あてもなく彷徨うのはどうかと思うが、今はそうでもしないと人里すら見つけられないようだ。

「むっ？」

なんて思っていたその時、馬の嘶きが聞こえてくる。

それも結構な数だ。

「馬？ 人が来たのか？」

普通、それならば喜ぶべきことなのだが、俺はなぜ跳躍して、木の枝に乗り、身を潜めた。

無意識にやってしまったが、三メートルはありそうな木に一瞬で跳び乗れるってすごいな、忍者。ま、俺の場合それで死んでるんだが。

それはそうと俺が思わず木に隠れたのは、気配というべきか、何かちくちくするような嫌な予感が全身に走ったからだ。

これも忍法の一つなんだろうか。

「……なんだ、ありゃ」

ややして、俺が見たもの。

それは馬を走らせる一人の少女だ。長い赤毛をたくわえ、同じく赤い槍を持った少女だ。彼女は、遠くからではわかりづらいが怪我をしている様子だった。

そして彼女を追いかけるようにざっと十二人程の兵士らしき姿の者たちが迫っている。

「厄介事って感じだな……」

その一瞬、俺は助けに入るべきかと思っただが、躊躇いがあった。

巻き込まれるのはごめんというよりは状況が把握できなかつたからだ。

そうやつてもじもじとしている内に状況に変化が訪れる。

「きゃあっ！」

少女が背後から矢を受け、落馬した。

少女は矢を肩に受けたのか、苦痛に顔をゆがめている。しかしまだ生きている様子だ。兵士たちは勢いを止めることもなく、追っていた。

「おい、ちょっと待てよ！」

兵士は手にした弓を構える。

その瞬間、俺は思わず飛び出していった。

「なんで体が動いた!？」

これも無意識の行動だったと、今では思う。少なくとも正義感とかそういうのではなかった。

ただ目の前で女の子が殺されかけようとしている。それを無視できなかったのだ。

躊躇なく放たれた矢が迫る。

少女の前に降り立ち、俺は背中 of 忍者刀を抜き放ち……！

「……！」

刀を振るい、迫りくる矢をはじき落とす。

その時、俺は必死で声を出すこともできなかった。思わず動いてしまった、思わずやつてしまったが、放たれた矢は全て叩き落とすことができていた。

内心、心臓バクバクである。

やれるという知識はあった。今の俺の身体能力ならば銃弾すらはじけるだろう。

だが実際にやるとなると話は別だ。

しかしできてしまった。

や、やつちまった。で、どうする、ここから？

突然のエントリーはいいが、殆ど考えなしの行動だ。

状況は最悪。少女は肩に受けた矢のせいで重症。血も流れているし、放っておくとやばそう。

敵は十二人、完全装備の兵士。

「さて、どうするか……」

\*\*\*\*\*

空気を冷たく感じるのは季節のせいだけじゃないはずだ。

目の前に展開する兵士たちからは無言の殺気を感じる。にしてもこいつら無表情すぎないか？ 俺という突然の乱入者にも慌てたそぶりもない。

というか目が虚ろで、こつちを見ているようには感じられない……なんだこいつら。

「あ、え、誰？」

逆に人間らしい反応を返してくれるのは後ろの少女だ。

とはいえかなり警戒しているのか槍を構えている。

むしろそのまっとうな反応がかえって安心できてしまう。

「自己紹介は、あとだ。それより、この状況は？ 兵隊が子どもを追い立てる、尋常ではない」

こんな場面に遭遇したのは初めてすぎる。

そのせいか、俺は結構緊張して、口調がおかしなことになっていた。

「理由を聞きたい。相手はまだ子どもだ……」

たぶん無意味だろうと思っていたが、俺は念のために兵士たちへと問いかけた。

すると返答は再び矢だった。俺の額を狙いました一射が飛んでくる。

「問答無用ということか？」

飛来する矢を難なく掴む。



ちくちくする感覚がさらに酷くなったので用心していたら案の定だ。さすがは忍者の動体視力といったところか。暗闇でも見えるし、飛んでくる矢も集中すればゆっくりと見える。

忍者って凄いい。

なんて感心してる場合じゃないな。

(あの怪我は早いとこ治療しないとな……)

さすがに、目の前で死なれるのは後味が悪い。

だがまごまごとしていたらそうなりかねない。

「キミ!」

「は、はい?」

俺は未だに警戒を続ける少女へと声をかけた。

振り向かずともわかる。少女はびっくりした顔をしているだろう。

「走れるか?」

落馬していたが、骨を折ってる様子はなかった。

「え、あ、あの……」

歯切れの悪い返事だ。もしかして腰でも抜けたか?

「逃げるぞ」

「に、逃げるって……」

悪いが悠長に話をしている暇はない。

しびれを切らしたように兵士たちに動きが見える。

このまま突撃してくるつもりだ。

「忍法・旋風!」

ある程度の忍法はすでにインストールされている。

俺が忍者刀をぐるぐる回転させると一瞬にして竜巻が作り出される。出現した竜巻は周囲の木々を揺らし、葉を舞わせた。

「これぞ忍法・木の葉隠れ」

飛び散らせた葉っぱで目くらましをする。忍者お約束の忍法だ。

だがこれだけじゃ力づくで突破されかねない。

俺は新たな忍法を発動させる。

「合わせ忍法・木の葉火炎壁!」

さらに旋風の勢いをつけることで舞い踊る木の葉同士が激しくこすれていく。山火事が起こる原因の一つにこうした現象がある。

その結果起こるのは、発火現象だ。摩擦熱によって次々と木の葉が発火していく。枯葉  
 ならば一瞬で火が点くが、あいにく今使ってるのは緑の若い葉だ。

「火遁・火柱！」

「魔力もなしで、風と火が！」

おどろく少女を尻目に、俺は手のひらをかざし、火遁を発動させる。原理は先ほど同じだ。空気の摩擦熱を利用し、燃焼を起こさせる。俺の場合は、その効力と範囲が強い。それだけのことだ。

とにかく、これで問題なく着火はできた。

一瞬にして俺たちと兵士の間に炎の壁が出現する。無理に突っ込もうものなら火だるまになる。そうでなくとも馬は怯えて前には出られないだろう。

「行くぞ！」

踵を返して俺は駆け出し、目を丸くしている少女を肩に担いだ。

「ほーっとするな！」

「うええええ？」

俺の忍法に驚いたのか何なのかは知らんが、少女は悲鳴をあげていた。それとは別に兵士たちの奇妙な声も耳に入ってくる。

「あああああ！」

「ひゃあああ！」

炎の向こうから奴らの悲鳴が聞こえてくる。

「ムッ？」

まさか突っ込んできたのかと思ひ振り返ってみるが、そうではない様子だ。

炎に怯えている感じだが、一体何なんだあいつら。薄気味悪い！

しかしこれはチャンスだ。敵は追ってこない。このまま逃げるなら都合がいい。

「近くに村か街はあるのか？」

とはいえ闇雲に逃げるだけじゃ駄目だ。目的地を定めないと延々と彷徨うことになる。

そして俺はこの世界の地理を知らない。少なくとも近くに光がなかったところを見ると、結構な距離を逃げることになるが、そうなると彼女の怪我が心配だ。

「三十キロ先にハーバリーの街があります！ 私そこから来て……！」

「遠いな……！」

とにかく、今はこの場を離れる。

早めに傷も応急処置ぐらいはしておかないとまずい。

少女の顔色が悪くなってきた為に、俺はひとまず森の陰に潜むようにして傷の手当てを優先した。

矢そのものはあまり深く刺さっていないようだが、矢じりにできた返しのできないで無理やり引き抜くと傷口が広がる。

かといって、引き抜く為の道具もないし、血止め、傷薬なんて便利なものもない。だが、ここで活用できるのが薬草学だった。当然、俺はそんなものは知らないが、忍者としての知識ならば存在する。ハイテク巻物のおかげだな。

俺たちのいる森にはおおざっぱな括りで薬草と言われる葉が自生している。薬草学をインプットした俺はどれがどの薬草なのかが一発で見分けられるというわけだ。

「すまんが、我慢してくれよ。いつまでも矢が刺さったままじゃ体に毒だから。痛いだろうが……」

ちよいとかわいそうだが、服の袖を切り裂いて丸めて口に詰める。歯が折れるからな。そして一気に引き抜く。躊躇していたら手遅れになる。

「うぐううう！」

「しみるぞ」

俺はちぎった薬草を手もみしてから握りつぶすようにして汁を搾り出す。それを傷口にしみこませ、残った薬草で傷を覆った。その上からさらに服の切れ端で縛り付ける。あまり清潔ではないが、これで応急処置は終わりだ。

「血止めのツボも押しておいた。これで無駄な出血は抑えられるはずだ」

ついでに忍者視点の人体構造学ともいべき知識も付与されているのか、俺は血止めのツボを刺激しておいた。とはいえ劇的に血がピタリと止まるわけじゃない。多少、抑制される程度だ。民間療法レベルのものだな。

しかし、意外に疲れる。暴れる少女を押さえつけて、薬を塗って……いくら知識があるとはいえ、実際にやるのは相当神経を遣う。

(いやそれだけじゃないな。傷口を見ても、俺はあんまり気にならなかつた……)

矢じりのせいで彼女の傷は結構えぐい。だが、普通それを見るとグロいと感じて気分が悪くなるはずだが、今の俺にはそういうのへの耐性もあるようだ。

それに、どことなく口調も硬いというか、なんというか。緊張だけが理由ではなさそう

（さしずめ、忍者モードに入ったからか？）  
 なんてそんなことがわかるのかと言われても困るのだが、なんとなくそう感じたただけだ。  
 忍者の知識や術を頭にぶち込んだ時にそういう立ち居振る舞いも自然とできるような  
 った、てな感じだ。

（まあ。ぎゃーぎゃーと騒ぐよりはいいか）

わけもわからず叫んで暴れるよりはずつといい。

とりあえず手当てが終わると、少女は大人しくなった。生きてはいる。

（さて、なんだか勢いでここまでやってしまったが、ここからどうしたもんかな）

目の前で女の子が殺されそうになっていたから助けた。それはいい。無意識の行動とはいえ、そのことについての後悔はない。さすがにあの状況で助けないって選択肢は後味が悪い。

ただ問題はここからだ。女神様は俺を忍者としてこの世界に放り込んだわけだが、具体的な目標がない。忍者の凄さを広める的なことを言っていたが、どうすりゃいいのやら。

「あの……魔法は、使わないのですか？」

俺が物思いにふけっていると、少女がおそろおそろ俺へと声をかけてくる。

さすがに顔色は良くない。

改めて見るとかなり若い。まだ十五、六ぐらいといったところか。槍を木に立てかけた赤毛の少女、目の色もどことなく赤い。よく見ると鉄ではなく革の鎧を身に着けている。それにしても魔法か。

「魔法？ 悪いが、そんなものはない」

神通力（魔力）なんて項目があったはずだが、巻物で調べても俺の忍法はあっても、魔法らしきものは存在しなかった。

使おうと思えば使えるのかもしれないが、忍法のように巻物を読んで覚えるということはどうにもできないらしい。

この巻物はあくまで忍者専用というところか。

「え？ でも、さっき魔法を使つて……魔力は感じませんでしたけど」

「あれは忍法。技だ」

「忍……法？」

まあいきなり言われてもわかんないよな。

「鍛えた技だ。それ以上のことは言えん」

「よ、よくわかりませんが、すごいんですね」

かくいう俺も実はいまいち理解してない。手から炎とか水とか出るし。

「そういう君は」

「私は攻撃スキルしか……回復魔法でちよっと苦手で……」

そう言いながらも少女は痛みをこらえつつ、傷口に手をあてがって何か呪文じゆもんのようなものを呟つぶやいていた。

すると少女の手から淡い光が発生する。

「……こ、これで傷口はふさがったかな……」

そうして少女が包帯を取っていくと、うっすらと傷は残っているが、確かに彼女の肩かたにあった矢傷はふさがっていた。

(魔法か、凄すごいもんだな)

これもまさしくファンタジーな異世界ならではだな。

忍法にはこうやって傷を癒やす技はあるのだろうか。今のところは確認かくんできないが。

「あの、助けていただきありがとうございます」

少女はべこりとお辞儀じぎをしてくれる。

佇たすまいというのだろうか、その仕草はどことなく清楚せいそだった。

女の子らしいとはまた違った感じだ。育ちの良さともいべきか。

とにかく悪い子じゃなさそうだ。

「私、アムと申します。アム・レンテス。ハーバーギルドに所属してまして……見通りの通り、冒険者ぼうけんしやをやっているのですが……あの、あなたは？」

ギルドに、冒険者か。ある意味ではお約束。とすると、この世界のあれこれも大体は察しがつくというものだが、細かい部分は落ち着いてから聞き直すとしよう。

とりあえず、自分が何者かだけは名乗っておくか。

「城戸音羽。見通りの通り、忍者にんじやだ」

「忍者？」

アムは首を傾なげている。

いかん……つい勢いとノリで名乗ってしまった。何を格好つけているんだ、俺は。

「忍者とは……まあ忍しのぶ、者だ」

こと細かく説明してもいいが、そんな暇ひまはなさそうだ。

「ええと、よくわかりませんが……ありがとうございます。何のお礼もできませんが、すみません。私、行かないといけなくて！」

アムは次の瞬間しゆんかんには立ち上がって槍を持ち、その場から駆け出そうとする。その方角はさっきの兵士たちの場所だ。

「おい、待て」

と俺が制止するよりも先に、アムはふっとその場に崩れ落ちる。

「ほら見る。貧血だ。大人しくしている」

俺が駆け寄ると、アムは槍を杖にして無理にでも立ち上がろうとする。

「いえ、ダメです。私、行かないと……助けないといけないんです！ あのモンスターを放っておいたら、大変なことに！」

「だから、待てと言ってるんだ。そんな状態じゃ何もできないぞ」

彼女は何か切羽詰まった感じだ。

兵士に追われていたことといい、事情があるのは明白だ。

「見た目こんなので、信用できんかもしれんが話してみろ。何をそんなに急いでいる」

今更だが頭巾で顔を隠した黒ずくめの男なんだよな、今の俺の姿って。

これを見て『忍者』だってわかるのは日本人ぐらいだろうし。

「……ここから五キロ先にカルロベという小さな港町があります」

アムはもう自分が無理できないことを理解したのか、その場に崩れたまま話し始めた。

「港町？ 五キロ先と言っても光ぐらいいは……」

少なくとも俺が空から見た限りでは光源はなかった。

海でも広がっているんじゃないかってのは思っていたが、どうやら間違いはなかった

ようだな。

「それで、そのカルロベがどうしたっていうんだ？」

「その町は今、恐ろしいモンスターに支配されているんです……」

「モンスター……さっき言っていたな」

異世界ならではって感じだが、茶化してる空気じゃないな。

それに町が支配されているか……。

「もともと、私たちはカルロベで催される結婚式の為にカルロベにいたんです。花嫁の為に希少な宝石を贈りたいとか、結婚式の警備員をして欲しいとか、宴会用の食材を持ってきて欲しいとかで、いろんな冒険者に声がかかったのです……私は、警備員ということに赴いたのですけど……それは異だったんです」

「異……つまり、君たちが町にやってきた時には既に？ しかし、なぜだ。一体どんなモンスターがいたっていうんだ？」

「恐らく……あれはスキュラです」

スキュラ……あまり詳しくはないが、確か海の化け物だったか。若い女の姿をした上半身、しかし下半身は怪物でそれはタコやイカのような姿をしているとも、狂暴な犬の頭部を無数に持っているとも伝わる存在だったはずだ。

その、上半身の美しい姿に惑わされた者は海中深くに連れ去られ食われてしまうとも聞いたことがある。

「町の人たちもそいつに操られて奴隷のように……私、町を助けようとして、それで……」

「返り討ちにあった……?」

アムはこくと頷いた。

「それだけじゃありません……スキュラは放置しておくとか次に仲間を生み出して、手が付けられなくなるんです。奴は人間に化けて忍び込むだけじゃなくて、その町の住民を利用して次々と自分のしもべでもある海洋性のモンスターを作り出して、内側から食い破るようにして町を滅ぼすんです。過去に数回、スキュラの手によるものだと思われる被害も確認されていて、その時は爆発的に増えたスキュラの眷属を止める為に軍隊が動いたとも言われるほどなんです!」

軍隊が必要なレベルで増えるだと?

いまいちピンとこないが、軍隊を例に出されたら、さすがに放置はできない。

「早くしないと大量のモンスターが溢れてカルロベだけじゃなくて、他にも被害が……!」

話していくうちに、じつとはしていられないと思っただかアムは再び立ち上がろうとする。

「待てと言ったんだ」

「ですが……!」

「君一人で突っ込んだところで状況が変わるとは思えない。仲間も、いないだろう?」

さすがにそれは多勢に無勢ってやつだ。

だが、アムはふるふると首を横に振った。

「私以外にも何人か……でも、あそこから逃げられたのは私だけで……だ、だから行かないといけないんです。見捨てるわけにもいきません!」

助けないといけない人がたくさんいるってわけか。

「君の考えもわからないではないが、その傷では……」

「いえ、大丈夫です。私、こう見えて結構頑丈なんです。それより、あなたは早くここから離れてください。無関係のあなたを巻き込むわけにはいきません。さっき言った、ハーバリーに早く逃げて、そして、このことを伝えてください。そうすれば、きつとギルドが動いてくれます!」

彼女はそんな状態でも自分より、他人を気遣うようだ。優しい子なんだ。

「いや、しかし、女の子を一人放つては……」

彼女の決意は固い。だが、それ以上に俺としてもこんな子を見捨てたくはない。どうしたものかと悩んでいる、その瞬間だった。

ぞわっとした寒気が俺の体を貫く。本能とでもいうべきか、頭の中に警報が鳴り響いているような感覚が走る。

これは、さっきの兵士たちと遭遇した時と似ていた。

「しっ、静かに」

「えっ？」

思わず、俺は手でアムの口をふさいだ。

音は聞こえずとも、何か嫌な気配を感じる。

これは、間違いない。敵意だ。

「むっ！」

「きゃあっ！」

どこからともなく現れた半透明の触手が一瞬にしてアムを拘束していく。

「アム……！」

アムを助けようと手を伸ばす。

「なんだあ！」

だが、その前に飛びのいてしまう。

俺はさらなる敵意を感じ取っていたのだ。

先ほどまで俺がいた場所へと真っ白な泡のようなものが撃ちだされていた。

しかもその泡はただの泡じゃなかった。じゅうじゅうと嫌な音をたて、異臭を放ちながら泡は土や草を溶かしていく。

「溶解液だ！」

気を抜きすぎていたことを後悔しつつも、俺は着地と同時に刀を抜き放つ。

鳥肌で体中がざわつくような感覚がさらに強くなる。

さっき俺が遭遇した兵士たちの比じゃない。もっとヤバイ奴だ。

「き、キドーさん……」

泡は飛んでこないが、俺の目の前ではアムが半透明の触手に捕らわれていた。

触手は粘着性の分泌液を流しているのか、うごめくたびにアムの体が粘液に覆われている。

「ひ、ひひ。この女、すべすべだなあ」

その声は森の奥から響いてくるようだった。

警戒がさらに強まる。同時に強化された俺の目は敵の姿をはっきりととらえていた。  
 「半魚人に蟹とクラゲ?」  
 森の奥から姿を見せたのは、魚の頭を持った半魚人の兵士たち。  
 そして奴らに従えるように現れる二足歩行の蟹とクラゲの化け物。そうとしか言いようのないモンスターがそこにはいた。

\*\*\*\*\*

蟹男の方は両腕がハサミで、背中には無数の足、口からぶくぶくと泡を噴き出しており、クラゲ男の方は全身から伸びる触手がアムへとつながっていた。

「ふん、やはり洗脳魔法程度じゃまともな仕事はできんか」

先ほどの声もどくやらこのクラゲ男のものらしい。

「馬鹿め。逃げられるとおもったか小娘。それに仲間もいたか……男なのは残念だが養分にはちょうどいい」

クラゲなせいか表情はわからないし、どうやって発声してるのかも不明だが、クラゲ男はこちらを小馬鹿にした風な口調で続ける。

「なんだ、お前ら」

刀を構え、俺は奴らを見据える。敵は半魚人の兵士が十、あとはクラゲ男と蟹男のみ。他に気配はないが、さてどうしたものか。

しかもアムは今なおクラゲ男に捕まっている。

「う、うああ……あ、はっ……なに、これ……」

「アム、どうした!」

クラゲ男の触手に捕まったアムは苦しむ様子ではなく、顔を赤らめ荒い息を吐き出していた。身を悶えさせているが、苦痛からというわけでもなさそうだった。

「おっと、動くな。動けばこの娘の腕か足、一本は消えるぞ」

俺を牽制するようにクラゲ男は触手をうごめかし、アムの四肢をきつく締めあげる。

「ああああああ!」

だが、アムは痛みの悲鳴よりも艶のある声を出していた。

「まあ、俺の粘液で痛みは快楽に変化している。腕を折る方が気持ちいいかもしれないがなあ?」

「お前ら、何が目的だ。なんの理由があって彼女を狙う」

「我が母上、スキュラがこの世界の女王になる為さ。そして母上の子が満ちる世界にす

るため。我らと母上だけの楽園を作る為……我らの兄弟を育む為」

「わかりやすい目的をどうも」

こうペラペラと自分たちの目的を語ってくれるのは悪党の常なのかもしれないな。

俺なんぞいつでも始末できる、冥途の土産のつもりか。

それにしても侵略ね。

「兄弟が生まれるには腹が必要だろう？ 母上からは傷つけるなど言われているが、最悪腹が残っていればいい。それまでに楽しむのもいいが……？」

余裕からなのか、クラゲ男は見せびらかすようにアムが身に着ける鎧をはがしていく。

瞬く間にアムは身に着けていた真紅の革鎧を剥がされ、さらには衣服まではぎ取られようとしている。

「ええ？ お前も男なら興奮するだろ。一枚、一枚、丁寧に剥がしていくとよお」

「ゲス野郎が」

見せつけているつもりか？

唾を吐き捨てたい気分だ。

「あ、兄貴。女は、女は母上のところに連れて行かなきゃ！」

たどたどしい声を出すのは蟹男だ。しゃべるたびに泡が噴き出て、周囲に飛び散る。

「ああ、そうだな。母上は怒ると怖いからなあ……」

そう言いながらクラゲ男はアムを連れたまま、下がっていく。

「待て！」

当然、追いかけてやろうとするがそれを阻むように半魚人どもと蟹男が道をふさぐ。

それに、俺としてもアムを人質に取られている以上、安易にクラゲ男を攻撃できない。

「はっはっは！ さらばだ、人間よ！」

まんまとクラゲ男はその場から消え去っていく。

「くそつたれ！」

俺がもう少し警戒を強めていればアムは……！

だが、今はそれを悔やんでいる場合じゃない。あのままではアムが危ない。

「こ、ここはおどおどねえ！」

「うるせえ、邪魔だ！」

俺は真つ向から蟹男めがけて突撃。

「いげえ！」

蟹男の命令によって、半魚人たちが俺を迎え撃つ。

奴らは手にした槍を構えて一斉にとびかかってくるが、その動きは俺にしてみればスロ

「モーションだった。」

「フッ！」

迫る半魚人どもに俺はクナイを投擲する。一瞬にして五本のクナイがそれぞれ五体の半魚人の脳天へと突き刺さる。

「いける！」

戦える。俺は、戦える！

俺は刀を逆手に持ち替え、接近戦へと持ち込んだ。生き残った半魚人は仲間の死体を踏みつけながら、統率もなく俺に向かってくる。

そんな動きで忍者を捕らえられると思うなよ。

「忍法・影渡り！」

影渡り。それは影隠と同じ種類の忍法であるが、あれがものを隠す、収納する忍法とすれば、これは影から影へと移動する忍法だ。

俺は目の前に迫る半魚人の一体の影に沈む。奴らは突然消えた俺に驚愕し、周囲を見渡すが、見つかるはずもない。

「そこ！」

その隙を狙い、俺は一体を切り裂く。

そして、再び別の影へと忍び込み、背後から切り裂く！

次々と切り、影へと移る。瞬く間に半魚人どもは切り捨てられていった。

「お前ええええ！」

一方、まさか半魚人が壊滅するとは思ってなかったのか蟹男は明らかな動揺を見せていた。

俺を危険だと判断したのか、蟹男はためらいもなく泡を俺に向かって吐き出す。

その泡は一直線に俺へと向かい、そして……！

「と、溶けた溶けた！」

蟹男は勝ち誇ったような笑い声をあげていた。

「溶けたとけ……げ、げげごばあ」

だが次の瞬間、蟹男は悲鳴を漏らすこととなる。

「残念、溶けてないんだな」

俺は傷一つない姿で蟹男の口の中に忍者刀を突きさしていた。俺個人としては使い捨てる勢いだったが、それと同時に俺はこの刀が溶けるわけがないと理解していた。

「ヒヒイロカネの刀つてやつか……女神様に感謝だな」

刀を含めた装備に関してだって、俺には既に知識が備わっている。

ヒビロカネ。オリハルコンやミスリルと言った架空の特殊合金、その一種という奴だ。つまりはただの鉄ではない。ゆえに、当然のごとく、刀は蟹男の口から奴を貫いていた。その昔、蟹の急所は口から突き刺すといいつてテレビで見たことがある。実際のところは知らんが、どんな生物でも口から刃を突き刺されれば、死ぬ。

蟹男はびくびくと体を痙攣させ、ぎよろぎよろと真つ黒な目を蠢かす。

「な、なぜえ！ おめえざつぎい……」

「あれが俺だつて？」

刀を抜き、泡を払いながら、俺は顎でさつきまで立っていた場所を指し示す。そこには溶けた等身大の丸太が転がっていた。

「忍者をなめるなよ、蟹野郎」

「ぐぎやあああ兄貴い、母上えええええ！」

断末魔の声をあげながら、蟹男は自らの溶解液で内側からドロドロに溶けて消えていく。

「アム……！！」

こんな奴に手間をかけてしまった。

今は急いでアムを助けなければいけない。

嫌な予感がピンピンとしている。このままじゃ取り返しのつかないことになりそうだ。



何より、彼女を放つてはおけない！

「無事でいてくれよ……絶対に、助けるからな！」

アムを助けたい。

状況に流され、そういう決断を下すしかない状況でもあった。

ただどあの子は、優しい子だった。こんな状況でも自分ではなく他人を心配できるような子だ。

なら、助けるしかない。これは、俺が自分で決めたことだ。

そして何より、今の俺にはそれをするだけの力があつた。

その力こそ、忍者だ。

「ああ何て言うか」

不謹慎かもしれないが、ふと思う。

「俺、忍者好きなのかもしれないな！」

## 次の段 忍者乱舞

「見えてきた。あれがカルロベか」

十数分の道のりを経て、俺は件の町、カルロベへと到着していた。道中、敵と遭遇することがなかったのは幸いだった。

それ以上に、俺自身の身体能力の向上には驚かされる。生身の体で俺は優に時速八十キロは余裕で出していただろう。ちよつとした乗用車並みだ。

「女神様には感謝つてところか。この力がなきや、まずこんなことをしようとも思い至らないだろうしな」

今、俺は町から少し離れた所で、木に登り、町の様子を観察していた。

港町というだけあって町のさらに後ろには海が広がっていた。カルロベ自体は小さな町なのだがその周囲の土地は入り組み、複雑な地形をしていた。

確か、こういうのをリアス式海岸とか言うんだよな。

「まるでB級のホラー映画だな」

町は真つ暗だが、うごめく影は無数にあつた。そして光が全くないわけでもないのだ。青白い薄い光がぼつぼつと見える。遠くからでは判別し辛い光だ。青白い発光体……まるで深海魚とかクラゲの発光器官みたいだ。

「魚人の数が少ないのか？」

そんな光に照らされて、海産物の頭を持ったモンスターたちを確認することができたが、予想以上に奴らの数が少ない。ここから見た限りではせいぜい十数体、むしろ住民の数の方が多い。

だが、住民たちは目がうつろで、ぼーっとしていた。尋常な状態でないことは間違いない。

この世界はファンタジーな世界だ。どこかに色んな種族が共存する街もあるのかもしれないが、少なくとも俺が見る光景は生活感が漂うようなものじゃない。

半裸かさもなくば鎧を身に着けた魚人ども、せいづらに奴隷のようにつながれる住民。奴らはぞろぞろと町の中心部へと移動しているようだ。

その光景は退廃的でことなく冒瀆的だ。

「……それにしても、なんだこの二オイ……」

しかも風に乗って何やら不快な二オイが漂ってくる。

魚が腐ったような二オイだ。

果たして、それが忍者特有の技能なのかはわからんが、どうやら俺は嗅覚も敏感になっているらしい。まるで犬になったような気分だが。

にしても気分が悪くなる二オイだ。

「海産物の化け物があるなら、この二オイも不思議じゃないっか？」

俺は木から飛び降りる。これ以上は見ている意味がない。

胸糞が悪いとはこのことだ。あの町に自由はない。あるのは狂気と支配だけだ。

「お魚いっぱいだな。もうちよつとかわいげがあれば竜宮城に見えなくもないがな」

少なくとも竜宮城自体はパラダイスだったしな。俺が見たカルロベはどう見てもたちの悪いお化け屋敷だった。

「ここからじゃアムの姿は確認できなかった……となれば町の中央か？　なんか猛烈に嫌な予感がしてきたな……具体的になんだと言われると困るが……」

またあの感覚だ。危険信号を伝えるようなびりびりとした感覚。

「……むっ？」

そうこうしているうちに、カルロベの方に異変が起こっていた。

ぼわっと光が町からあふれ出ようとしている。それと同時に俺の警戒がさらに強くなっ

ていく。もはやびりびりと通り越して肌を突き刺されたような感覚までやってきた。

これは急いだほうがいい。

「無事でいてくれよ、アム」

初めて会った女の子がひどい目に遭っているのを見捨てるほど、俺は冷たくないはずだ。

\*\*\*\*\*

町へと侵入した俺は気配と姿を隠しながら移動していた。

ことが起きているのは町の中心部。本来であれば広場として町の憩いの場だったであろう場所は今や狂乱の宴が催されていた。

それはちよっとしたカルトの現場ともいえるだろう。

魔法陣のようなものが描かれた広場には生贄のように並べられた住民。それを魚人たちが取り囲む。

それを見下ろすように作られた祭壇には一人の若い美女が立っていた。薄青のドレスを着た女性。

ぱつと見は普通の人間だ。むしろその普通さが異彩を放っているわけだが、あふれ出る

邪悪な気配は隠せるものじゃない。

「あれが、母上……スキュラか」

スキュラ。今のところは普通の女性にしか見えないが、あれが偽りの姿だというのはもうわかってる。

そして、奴のそばにはあのクラゲ男がいた。

アムもいまだ奴の触手に捕らえられている。

アムは全裸の状態で十字架のようにクラゲ男の触手に繋がれていた。

「ああ、もうじきね。この女を贄に、私の最高の子供が生まれるわ……」

十字架状態のアムをなでるようにスキュラが囁く。スキュラはアムの肢体をゆつくりと撫で、首筋からみぞおちにかけて唇を伝わせた。

「う、んん……！ や、めて……！！」

「大丈夫よ。この粘液のおかげで気持ちいいでしょう？ 大丈夫、痛くないわ。もうじき、あなた、お母さんになるのよ。うふふ、私と同じ。うれしいでしょう？ お母さんよ。まあこの子が生まれたらあなた弾けて死んじゃうだろうけど」

「い、いやあ……助けて……」

アムは必死に快楽を堪えている。体を震わせ、必死にあらがっているのだ。

「無駄よ。この町の女と同じく、私の子を孕みなさい。それだけがあなたたちの価値なのよ」

「キドーさん……助けて……」

その言葉を俺は無視しない。

「ああ、今すぐに助けてやるさ」

だから、俺は盛大に目立つように登場してやったのさ。

「トアッ！」

闇夜に浮かぶ月を背に、俺は影から取り出した弓矢を構えていた。

弓道なんざやったことないが、この体は既に弓の扱いを知っている。俺は瞬時に無数の矢を魚人どもに向けて放つていた。まさしく雨のごとく降り注ぐ矢は魚人どもを貫くが、一部甲殻類の姿をした連中にははじかれてしまった。

だが、この先手はでない。

魚人どもは混乱し、統率を欠いていた。

その際に俺は真つすぐに祭壇へと走る。

「むう、貴様は！」

クラゲ男は俺の姿を認めると、慌てふためいていた。死んだとも思っていたようだな。

「何をしているの、潰しなさい」

狼狽する魚人どもと違い、祭壇のスキュラは冷たく言い放った。その言葉はなんらかの強制力でも持つのか、生き残った甲殻類の魚人どもが一斉に俺へと狙いを定めてくる。

「ちっっ！」

まるで津波のように押し寄せる魚人たち。

「すりつぶしてやりなさい」

スキュラの命令を受け、甲殻類どもの爪が無数に振り回される。

その中に俺は呑み込まれていくのだが……。

「本日二度目！」

甲殻類どもがめつた刺しにしているのは変わり身となった丸太だ。

本当の俺は既にスキュラたちの頭上へと跳躍している。

そして！

「火遁・火炎車！」

火炎車。灼熱の炎を風に乗せ敵の周囲を覆う忍法。燃焼効果により渦の中心部は無酸素状態となり、地獄の苦しみを味わわせるのだ。

それを集まった魚人どもめがけて放つ。猛烈な勢いで炎と風が奴らを包み込んだ。

悲鳴すら上げる前に連中は見事炭と化すことだろう。

「何をしているの、止めなさい！」

スキュラがクラゲ男をけしかけるが、もう遅い。

「アムは返してもらおうぞ！」

祭壇に降り立ち、既に抜き放っていた刀でクラゲ男へと斬りかかる。

「させるか！」

クラゲ男はアムの拘束には使っていない残りの触手を俺に差し向けてきたが、もはや無駄だ。

「なんだとお！」

なんなく迫る触手を斬り落とし、俺は止まることなく、クラゲ男へと肉薄する。

「斬！」

奴は断末魔の声すらあげることなく、真つ二つに切り裂かれる。

同時に触手たちも力を失い、アムがずるりと落ちてくるのをキャッチ。

「あ、あふ……キドー……さん？」

もはや限界寸前だったのか。アムはうつろな瞳で、それでも俺の方を見つめていた。粘液まみれでかわいそうだし、服も身に着けていないのはかわいそうだが、もう少し待って

いてくれ。

「すぐ終わらせる」

俺は上着を脱ぎ、アムにかぶせてやると、最後の一人。スキュラへと対峙した。

「な、何者なの！」

突如として儀式をめちゃくちゃにした俺。仲間を瞬間に始末したこともあってか、スキュラはかなり警戒している。

「まさか、ギルドが送り込んだ討伐者！ こんなにも早く？」

討伐者？ なんのことを言ってるのか知らんが。

「違う。俺は、忍者だ」

刀を構え、スキュラを見据える。

「なんだっていいわ！ よくも私の可愛い子供たちを！ 許さない、許さないわ、あなた！」

スキュラから放たれる魔力が凄まじい上昇を見せ始めていた。

ずいぶんと怒り心頭な様子だがそれはこっちの台詞だ。

「黙れ。町を支配し、アムを辱めた貴様らを許すわけにはいかん」

「死ねえ！」

スキュラは一瞬にして低く唸るような声を出すと共に美しかったその顔を引き裂き、醜悪な姿を見せた。無数の牙がまるで回転のこぎりのようにうごめいている。下半身からはタコのような触手が伸び始め、それぞれの先端には鋭いかぎ爪があった。刹那、スキュラは呪文を唱えた。

「ウォーターアロー！」

歌うような詠唱に乗せてスキュラの口から水の矢が放たれる。

「……………」

目にも留まらぬ速さで飛来する無数の水の矢は瞬く間に俺の全身を貫いた。

「キドーさん！ いやあああああ！」

「ふん、しよせんは人間よ」

心底つまらなそうにスキュラが吐き捨てる。

だがな、さっきの俺の忍法を見てその余裕はちよつとなめすぎだろう？

「なるほど、直撃を受ければ無事じゃすまないな」

そんなスキュラの隣で、俺は腕を組みながら答えた。

「な……………」

驚愕するスキュラ。だが、奴はさらに驚くべき光景を目の当たりにするだろう。

「ま、当たらなければいいだけだ」

祭壇の壁にもたれ掛かる俺。

「しかし、ウォーターアローか。もう少し派手な技はないのか？」

祭壇の上部に座る俺。

「はあ、しかし魔法はやっぱり水属性なんだな。溶解液ぐらいは出すんじゃないかって思ってたんだがな」

アムのそばに立つ俺。

「キドーさんが、いつばい……………」

様々な場所に様々な俺がいた。

「何？ い、いつの間に仲間を……………」

「仲間？ 勘違いしてないか？ 最初から、俺は一人だけ？」

「え……………」

その瞬間、俺は、スキュラの喉を背後から刀で貫いた。

「俺は、ずっと、貴様の後ろにいたぞ」

「ぎゃあああああ！」

えぐるようにして、俺は刀を突き立てる。

「まだだ！」

様々な場所にいた俺は各々の武器を構えてスキュラへと攻撃を開始した。クナイを投げ放ち、鎖鎌くさりかまを振るい、手裏剣しゅりけんを投擲とうてきし、矢を放つ。

これぞまさしく忍者の高等忍法が一つ、分身殺法。数多あまたの俺の分身がそれぞれの武器を手らんぶに乱舞するいわゆる必殺技と言えるものだろう。

「魔力はあるようだが、肉体は脆弱ぜいじやくなようだな」

連続攻撃を受け、スキュラはズタボロになっている。

奴からは膨大な魔力を感じるものの、それを肉体強化に使っていないようだ。何故なのかはわからないが、こっちにとっては都合がいい。

「貴様ああああ！ 許さないいいいい！」

それでもスキュラの生命力は高いらしい。金切り声をあげながら、触手しゅしゆを伸ばしてくる。

「遅い！」

触手が俺をとらえようとするよりも前に、俺はクナイを一斉に投擲する。クナイは触手と床ゆかとをつなぎとめるようにして突き刺さった。

「今まで好きにしてきた報むかいだ」

分身の俺がすべて消える。

本体の俺は刀を構え、スキュラの目の前に立った。

「天誅てんしゅう！」

そして、奴やつの首を斬り落とした。

ばたりと、スキュラの体が倒れ、海水のような透明な血液が流れ出していた。

刀の血のりを払い、鞆たもとに収め、アムの方へと向かう。

「に、逃にがすものかあああ！」

「殺気が漏れているぞ。ばれてないでも思ったか？」

背後から迫りくるスキュラの攻撃は読んでいる。

俺は一瞬にしてその場から消えると、入れ替わるように奴の背後をとり、一刀両断に斬り伏せる。

「見た目通りに化け物かよ」

俺が斬り捨てたのは奴の下半身を構成していた触手の塊かたまりだった。それ単体が一つの生物としても活動ができるようで、奴は自らの意識をそれに移し、不意打ちを狙ったのだろう。しかし、それすらも失敗に終わった。

「気配は、なし」

スキュラの放っていた気配は完全に途絶とだえた。

それと同時に町の方から奇妙な悲鳴が上がっている。俺は、何事かと思い周囲を見渡す。かろうじて生き残っていた魚人たちが、その形を保てなくなったのか水を吐き出しながら、干からびていく姿があった。

スキュラが死んだ影響なのだろうか。余計な手間が省けたのは良いことだが。

また意識を奪われていた住民たちもばたばたと倒れていく。生死は確認してみないことにはわからない。

「……はて、これはなんだ」

悲鳴が完全に消えると、あるものが目に入った。

それはスキュラの死体のそばに無造作に転がっていた。

球体状の物体で、異様な魔力を放っている。

「なんだ、これ。タマゴか？」

スキュラって卵生なのか？

しかしこの魔力量、まさかと思うが俺がスキュラのものと思っていたのはこのタマゴのものだったのか？

やけにあっさりスキュラを討伐できたと思ったが、まさかな。

「……戦利品？」

破壊するべきとも考えたが、こういう代物は下手に扱いたくない。

俺はいそいそと影隠にタマゴをしまい込んだ。

「……アム、大丈夫か？」

そんなことよりもアムだ。

俺は彼女に駆け寄ると、抱きかかえる。

「んひゃ、あの、その……ちよつと待ってください……」

俺が触れた瞬間、アムはびくと体を大きく震わせて妙に艶のある声を上げた。

「え、いやだつて……あ」

そ、そういえばクラゲ野郎の粘液ってなんかそういう効果があるって言ってたよな。

抱きかかえた後でそれを思い出した俺。

「ええと、下ろした方が……」

「んん！ やあつ……し、振動で、敏感になるから……あの、動かないで、欲しいです……」

「いや、でもこの体勢は……」

今の俺の姿はアムを抱きかかえた状態だ。

凄いいま更だが、半裸の女の子を抱きかかえる二十九歳男性。

普通なら逮捕だよ。

「お願い、します……今、動かれたら、私……」

「あ、ああ、わかった」

いやもう、言う通りにするしか、ないだろ？

(いや、しかし……こんな時に思うのもなんだが)

アムを抱きしめながら、俺は昇りゆく朝日を眺めて、ふと思う。

俺は初めて自分の決断で動いた。アムを、助けたいと思った。

それはこの忍者の力があつたからというのも大きい。

これがなければ俺は決意することもないし、そもそも彼女を助けることもできなかっただろう。

スキュラなんて化け物の餌食になっておしまいだったはずだ。

(忍者の……力……これがあれば)

俺は、自分の、自由な人生が送れるんじゃないかって、思うのだ。

\*\*\*\*\*

突然だが、俺は今、会議室のような場所で頂頂面な方々に囲まれていた。殆どが老人で、いかにも重役ですという雰囲気を出していた。

スキュラを討伐した後、しばらくするとカルロベにとある一団がやってきた。

かなりの重武装で、統一された装備を纏った彼らをアムは王立軍と呼んだ。各地に派遣された国の先鋭たち。恐らくはやつとカルロベの異変に気が付いて駆け付けたということだろう。

彼らはカルロベの状況に啞然としていたが、仕事は早かった。意識不明の住民たちの保護に始まり、町の封鎖、そして俺とアムを拠点であるハーバリーへと移送してくれた。

ただ、アムはそのまま病院へ、なぜか俺はこの会議室に直行させられたというわけだ。

「ふむ」

そんな空間の中に一人だけ異彩を放つ女性がいた。

「にわかには信じがたい……と言いたいところだけど、証拠品を見せられれば信じる以外にはないわね」

明らかに周りの重役たちよりも一回りも二回りも若そうな姿。まだ二十代も半ばといった頃あいだろうか。

長く透き通った白髪は光の加減かうっすらと桃色に光っても見えた。薄暗い空間の中で

もはつきりと彼女の白い肌は目につき、キリリと細い目はじっと俺を捉え、どこか値踏みするような視線を向けていた。

(こりや人間じゃないな)

どうしてそう思ったのかはわからない。直感のようなものだ。

彼女が腰掛けるのはいわゆる議長席。その場で、一番の権力者はこの女性ということになる。

バリバリのキャリアアウーマンってやつか？

「では、確認の為、もう一度聞きましょう。このスキュラを倒したのはあなた、で間違いないのね？」

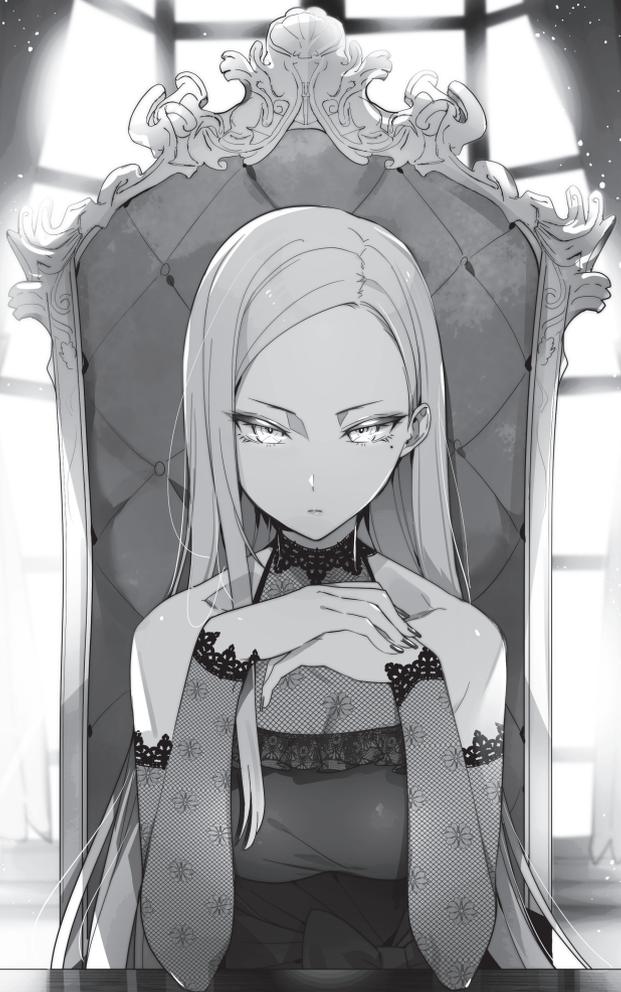
会議室の中央には俺が討伐したスキュラの首が置かれていた。

「左様」

俺は小さく頷く。

しかし、昨日から思っていたんだが、俺、時々この口調になるが、これも忍者化のせいなのか？ まあ別にいいんだが。

「しかし、スキュラは高位のモンスター。聞けば町を食らいつくし、相当な魔力を得ていたはず。それをたかが一人で？」



この会議が始まってからずっと俺を疑っているのは重役組だ。全員がとは言わないが、何人かは俺が誰かの手柄をかすめとったのではと思っているらしい。

まあ身分の定かでない男を信用しろってのは難しいか。こうして証拠の品もあるというのに。

「スキュラは放っておけば眷属を生み出し、伝承によれば、スキュラが眷属を増やし続けた結果、国一つが滅んだともいわれる存在。Aランクの冒険者でも単独討伐ができる者は少ない。それを冒険者でもない男が？ 信じられませんか」

それでもってそんな中で一番俺に懐疑なのが、この男だ。会議が始まってからずっと俺を目の敵にしてやがる。この手の男は恰幅がいいだけのじいさん……と言いたいのが、この男はやせ型で、目つきも鋭く、インテリな感じの風貌だった。身に着けているのも豪華絢爛とは違い、質は良いがそこまで派手ではないスーツ。正直、おしやれのセンスは抜群だ。

「言葉は選びなさい、カウウエル卿。もし、彼が本当にスキュラを討伐した者であれば、この場にいる全員が始末されてもおかしくないのよ？」

「ですが、サリー殿。このような身分不確かな男の言うことを……」

「カウウエル卿。彼の身に沁みついたスキュラの魔力や血を見れば、彼が討伐したことに疑いはないとみるべきでしょう。仮に横取りをしたという話が本当なら、スキュラを討伐できる者たちはどこへ？ それほどの腕がありながら一人に殲滅させられる方が信じられないわね」

サリーと呼ばれた女性は意外と俺の肩を持つてくれる。そして彼女の言葉はかなりの力を持つているのか、重役が彼女の意見に頷いている。

「まあ確かに」

「単独であれ、パーティであれ、その手柄を横取りする方が難しいですからなあ」

会議の流れはもはやこれで決定しようなものだろう。

カウウエルと呼ばれた男は納得いかないようだが、それ以上は言葉を発することはなかった。

ただ嫌な目で俺と、そしてサリーを睨んでいるだけだ。

「さて、それよりも私に気になるのは、このスキュラがいかにして我々に気が付かれずに、カルロベへと侵入し、まんまと力を蓄えていたのかです。あなた、確かキドーと言ったわね。何か、そのことについては？」

「私から申し上げられることは少ないのです。私はアムという少女を助けたまで。その結果、このスキュラを討伐しただけにすぎません。ただ、奴と奴の配下はこの地上を支配す

るとだけ」

「力のあるモンスターが考えそうなことね……各地方に警戒を厳しくするように通達します。最近ではモンスターの出没も多いみたいだし」

その言葉を最後に会議は終了を迎えた。

ぞろぞろと重役たちが退出していく中、サリーは一人残り、俺を呼び止めた。

「キド・オトワ。スキュラの討伐を成し遂げたあなたには報酬を与えたいところだけど、あなた、まだギルドへの登録は済んでいないようね」

「はあ、そう、ですね」

「そ。なら、ギルド支部へ来なさい。話はそれからよ。それじゃ」

サリーはそれだけ言うときさきと出ていく。

俺はというとあっさりと解放された。

この街の庁舎らしき場所に俺はいたのだが、問題なのはこの街のことを何も知らないということである。

「ギルド支部って、どこだ」

途方に暮れるしかない。

街に着いたのはいい。俺自身も拠点が欲しかったというのもある。どうあれ、俺はこの

世界にとつては異邦人であり、生活基盤も常識もよくわからないからな。

忍者のスキルの中には野営、野宿の知識もあったが、実際にそれをやりたいかと言われると俺は少し御免だ。寝るならベッドか布団がいい。さすがに固い地面の上は嫌だし、何より、疲れた。

この世界にきた途端にスキュラの騒動に巻き込まれ、奴を倒し、そしてさっきの会議だ。

徹夜なんだよなあ。

一睡もしていないのに、まだ体は元気だが、なんとか精神的に疲れた。

「あーどうしたもんなあ。支部とやらの前に宿を探したいが……あれ？　そもそも、俺、

この世界の金……」

その一瞬で俺は顔面蒼白だ。金がない。そう、俺、無一文なのだ。

「や、やべえ……これは野宿決定か？」

おのれ女神様。一泊分の宿賃ぐらいは融通してくれてもよかつただろうに！

「あの……」

などと俺が今どこで何をしているのか不明な女神様に憤りを感じていると、聞き覚えのある声に呼ばれた。

振り向くとそこにはアムがいた。鑑姿ではなく、どこにでもいそうな町娘のような服装

だった。

「アム！ 無事だったか！」

病院に運ばれてからのことはわからないが、どうやらすぐに退院できたようだ。

「はい、その、ご迷惑を……」

アムはすつと後ろに引き下がりがり、べこりと頭を下げる。

「キドー様も大丈夫でしたか？ その、色々と聞かれていたようですし」

「ん？ ああ、事実確認ぐらいだ。それ以上のことはない。それよりもなんか、ギルドにこいと言われたんだが……場所がわかんなくてね」

「あ、それじゃあ、案内します」

「頼むよ」

アムに案内をお願いし、俺はやつと異世界の街を堪能できる。

外壁に囲まれた巨大な街。道行く人々はヨーロッパ系の顔立ちが多い。金髪、茶髪の間が多数。服装も生活様式もこれでもかかと中世、近世ヨーロッパに近い。

(なんとなく想像通りだが、こう見るとアムは結構独特なんだな)

つぶさに観察していたわけじゃないが、アムの顔の作りは彼らとはどことなく違う。と言つてもまるつきり違うつてわけじゃないが、どちらかといえばアムの方が瞳が大きく感じる。

赤い髪の毛も珍しいといえれば珍しい。ざつと街を見渡しても同じような色を見ない。

「ここは交易も盛んなのですよ」

なるほど、言うだけあつてか活気もあり、そこら中で屋台が広げられ、荷馬車が行き交う。

「さ、行きましょう、キドー様」

それにしても「様」ねえ。

カルロベの一件のせいとか、アムはちよつと俺によそよしい。まあ無理もない。気が付けば「さん」から「様」になってるし。

それになんとなくお互いの距離に間がある。別に俺は無理やり近づこうつてわけじゃないが、アムの方がそれとなく離れようとしているのだ。

「……アム、もし謝っておくべきことがあるなら、謝る。君にあまり迷惑はかけられないし、名譽もあるだろうし。場所さえ教えてくれれば、俺一人でギルドに行くのだが？」

彼女を助けたのは殆ど偶然と成り行きの結果だ。そりゃ可愛い女の子にいいところを見せようつて下心もあったが、それは置いとく。

とにかく、本来、俺と彼女は無関係だし、彼女は彼女で生活がある。少し不安は残るけ

れどもだ。

「え！」

俺がそのように提案したところ、アムはバツと振り向き、ものすごいショックを受けたような表情を浮かべていた。

「ど、どうしてですか！ 私、何か至らないことでも？」

さっきまでのよそよそしさはどこへやら、アムは一瞬で俺のそばまで近寄ってくる。まるで捨てられた子犬のようだった。若干涙目なのが可愛い。

「いや、ほら、色々あったとはいえ、なあ？」

カルロベであったことを話すのは彼女の名誉に関わるので、それとなく濁す。

まあ全裸の女の子が男に抱きかかえられていたってちよつとトラウマになっても仕方ないし、距離を離されても当然だろうし。

むしろ悲鳴あげて逃げられないだけましと言えるだろう。

「そ、そんなことありません！ キドー様は私の命の恩人です。それに、私まだお礼もできてないのに……」

「俺は別にそういうのが欲しいわけじゃないんだが」

「いいえ、ダメです。恩には報いなければならぬと教えられています。あの時は私もち

よつと切羽詰まって余裕がなかったですけど、今は違います。ですので、街の案内は任せてください。ギルドですよね？」

「ああ、でもいいのかい？」

「いいんです！ さ、行きましょう！」

なぜだかアムはちよつぱり嬉しそう。

「恐らくキドー様がギルドに呼ばれたのは冒険者の登録に関してだと思えます。キドー様、まだギルドには所属してませんよね？」

「来たばかりだからな」

「では案内がてらご説明します。まず冒険者というのは……」

「……ご存じなんですか？」

「ま、なんとなく概要だけはな」

出会った時にもそれとなく説明を受けたが、その時点で俺の中ではある程度の想像がついていた。良くも悪くもお約束というか、お決まりな感じだったし。

今はそれが助かるってもんだが。

さて、それは置いても張り切って俺に色々なことを説明しようとしていたアムは出

鼻をくじかれた感じで少し落ち込んでいた。

「うう、外国の方だからきつと知らないんだろうなあって思ったのに……」  
ちなみにだが、俺の立場に関しては便宜上『外国から仕事を求めて旅をしている』という事になっている。

地元には仕事がないのでよそに出稼ぎに行くというのはさほど珍しいものじゃないはずだ。この世界が俺たちの世界でいうところの中世、近世であれば外国からの労働者だって普通にいる。

さらに言えばこの世界の冒険者というシステムから考えれば、恐らくその手のものが多  
いはずだ。

「あーいや、概要を知ってるだけで細かいことまでは……説明いいかな？」

ま、実際俺の常識と離れてる部分もあるだろうし。理解したつもりが一番怖い。

「はい！」

アムはバツと笑顔に切り替わる。

コロコロと表情の変わる子だな。可愛いもんだ。

「んん、では説明しますね」

それらしく咳払いをしつつ、アムは語り始める。

「冒険者についてはキドー様がおっしゃったようなものです。依頼を受けて様々な土地へと飛び交う私たちのことを人々は冒険者と呼ぶようになりました。まあ私含めて大半の人は同じ拠点で活動しちゃうんですけどね」

「冒険者というよりは何でも屋……というべきかな？」

「まあそうですね。殆ど自由業のようなものですし、依頼を受けるも受けないも自分の判断。一つだけ確実なのは、自由でも自分でお仕事しなければご飯は食べられないってことです」

「そいつは真理だな」

そりやそうだ。働かざる者食うべからずとは世界共通の認識のようで安心だ。

冒険者は自分のやりたい仕事をして生きていく。そこには危険もあるだろうし、刹那的で、あえて濁さず言えば日雇いの労働者より不安定ともいえる。

だがそこに存在するのは自由だ。他人に押し付けられることなく、自分のやりたいようにやれるのは良いことだな。

まあいくつかの常識に照らし合わせての自由だろうが、すくなくとも前の会社よりははるかに空気は良い。

「冒険者の仕事の殆どはモンスター退治です。ただし、たとえ人間であっても秩序を乱し

て好き放題に暴れている人たちもモンスターとして見られます。これ、意外と勘違いしている人も多くて、亜人もモンスターってわけじゃないんですよ。昔はこれでひと悶着あったようですし」

ほう、それは意外な話だ。

モンスターと言えば俺なんかはやつぱり獣みたいな奴も亜人も一緒に考えてしまいが。

この世界におけるモンスターとは「犯罪者」や「害獣」という意味を持つものかもしれない。

「そして重要なのがランクです！」

「ランクまであるのか」

「はい。現在はAからEとなっていてまして、Aが最高ランクです。Eが最低ランクですけど、これは殆どお試し期間みたいなものです。お使い程度の依頼でもいいのでクリアしていけばすぐにDやCランクに上がりますし」

なんかこう、ますますお約束って感じだな。わかりやすくして良いけど。

「あああと、名誉ランクみたいなものですけど、Sランクというのもあるんですよ。大きな功績を残したり、実力を認められたりすると、あたえられるものなんです。まあ、数えるほどしかありませんけどね」

「そりゃ凄いい」

まあ仕事や役職に対してランクをつけるのは別に珍しいことじゃないな。仕事の質に開くものであれば大なり小なりのランクはつくってもんだ。

「えへへ、偉そうなこと言っていますけど、実は私、最近Dに上がったばかりなんです」  
 アムはちろっと舌を出して、照れ笑いを浮かべた。

「ということは、俺が冒険者になると、君は俺の先輩になるってわけだ？」

「そ、そんな先輩だなんて。あまり偉そうなことは言えませんが……でも大丈夫です。規則とか規約とか、ルールなんかはばっちりですから。覚えましたが、勉強もしたので、わからないことがあればきちんと教えますとも！」

「そうか、それは安心だ」

「はい！ 冒険者は私の長年の夢でしたから！」

ここまで、語り続けるアムの目はとてもキラキラと輝いていた。本当に好きなものを語るようで、見ていて気持ちのいいものだった。

しかし、そうなる気になってくるのは、なんだってアムのような子が危険な冒険者なんてことをしてるのかだ。そういう世界だから、では説明はつかんだらうし。

金や名誉の為にとか、色々と理由はあるのだからうけど、それを今聞くのな。

「そしてそんな冒険者をサポートしてくれるのがギルドです。特にギルドカードが便利なんですよ。身分証明証にもなりますし」

アムはそう言いながらカードを取り出そうとして……。

「……あ」

石のように固まっている。

「あーええとですね……その」

突然、彼女はぎこちない笑みを浮かべながら説明の続きを始めた。

「おいおい、まさかと思うが。」

「はい、ええと、ギルドカードですけど、これがないとギルドから依頼を受けることができませんからね。発行し忘れたり、なくしたりすると大変なんですよ。幸い、再発行は簡単ですけど、ペナルティなんかもあります……中にはランク降格なんてことも……」

さっきまではきはきとしていたアムだが、徐々に顔色が悪くなっていくのがわかる。もじもじと手を動かしたり、目はきよろきよろとうごめいていて、控えめに言って不審すぎる。

「なあアム。もしかして……」

「あ、あはは……失くしちゃい、ました……」

アムはがくりと膝を落としてうなだれる。

まあ、なんだ、だろうなとは思ってたよ。

思えば、彼女はあの海産物たちに身ぐるみを剥がされていた。

そういえば、俺もあの装備を回収とくしてなかったが、まさかあの中に？

「ど、どうしよう……あのカードに私の全財産の情報が……キドーさん！ 急いでギルドに行きましょう！ 案内しますから！」

「その方がいいな……」

切羽詰まった様子のアムは俺の手を取って駆け出す。

なんだか、この世界にきてからゆっくりできてないな。

そうこうしているうちに、俺たちはギルド・ハーバリー支部へと到着した。

「ここです！」

大方の予想通り、ギルド支部はでかい建物だ。パツと見た感じでは城とも勘違いしてしまいたいような佇まいで、そこだけ石造りではなくレンガだとか大理石などで派手に造られている。

しかもこの街の二割を占めているんじゃないかってぐらい敷地を取っていた。

アムが言うには一応国営の組織なので各街には支部が置かれているとのことだ。本部と

呼べる場所はこの国の王都『アトラシア』にあるという。

「さ、行きましょう！　まずはギルドカードの発行です！」

こうして、ドタバタな空気の中、俺はアムに支部へといざなわれた。

\*\*\*\*\*

ギルド支部へと足を踏み入れた瞬間。

そこに広がった光景はまさしく『異世界』だった。

なんせ俺やアムと同じような人間もいれば、そんな奴らと肩を組んで酒を飲むトラの顔をした獣人もいるし、背の低いゴブリンたちが地図を片手にせわしなく駆け巡っている。

奥の方では蛇の顔を持ったリザードマンが喧嘩をしている。

(うちの会社も口々にグローバル化とか言ってたが、この世界の方が最先端だな)

下手をすればモンスターとひとくりにされそうな面々が分け隔てなく同じ空間にいた。彼らも冒険者なのだろうか。そして、これがこの世界の常識ということなのだろうか。

彼らは見た目もそうだが、武器も防具も多様だ。そもそも身に着けてるかどうかとも怪しい連中もいる。

中にはアムのような女性もいるのだが、なにやら妙に扇情的な姿が多い。

(あれはそういう流行りなのか?)

ビキニアーマーっていうのか?　ああいう格好をしていても恥ずかしいって思うことはないんだろうか。それとも慣れというものなのだろうか。

しかもよく見ると耳がとがっている。

(エルフってやつか……なんか感動だわ)

エルフ以上にファンタジーな連中を見てきたのに、エルフとの出会いはなんか格別だ。

「んん！」

じいーっと見ていたわけじゃないが、アムがわざとらしい咳払いをしてくる。

「行きますよ！」

「怒らないでくれ。うちの地元じゃ珍しいんだ」

「じろじろ見ちゃ失礼です！」

ぶくーっと頬を膨らませて怒っている。子供っぽい。いや、子供か。

「見るよ、ガキに連れられて変なのがきやがったぜ」

「見ねえ顔だな。どこの田舎から出てきたんだあ？」

「よお兄ちゃん、女の世話になつてんなら俺も紹介してくれよなあ」

これはある種の洗礼か？

冷やかして嘲笑の言葉が飛んでくる。叫んでるのは案の定、酔っ払いどもだ。

「気にしちゃ駄目ですよ。ああいう人たちは、まあ、よくいるんです」

「構わん。気にしてないから。むしろ、慣れてる」

遠まわしに嫌味を言ってくるだけなら、まだマシな部類さ。うちの上司どもみたいに絡み酒をしてこない限りはな。

「ほら、行きましょう！ まずは受付で登録申請をしないとです！ そして私のカードの再発行も！」

ずんずんと人込みをかき分けて行くと、ギルドの中央に位置する場所へと到着する。そこには巨大な樹木があり、その周りにカウンターがずらりと並んでいた。そこにはいわゆる受付嬢というべき女性たちが多くの冒険者たちに対応をしているのが見える。

「マイネルスさん！」

アムはそのうちの一人のもとへと俺を案内してくれた。

「ああ、アムかい」

そこには間違はなく受付嬢がいた。

身長二メートルはあろうかという巨軀に猪のような顔を持った受付嬢であったが。

「キドー様、こちらベテラン受付嬢のマイネルスさんです！ オークです！」

「どうも」

マイネルスは気だるげに頭を下げる。

俺は俺でちよっと圧倒されている。偏見なのはわかっている。でもオークが制服着て受付している姿はものすごく違和感があるのだ。

「聞いたよアム。死にかけたんだって？ ま、生きててよかったよ。あんたの慌てっぷりが見れなくなるのはそれはそれで寂しいからね」

マイネルスは耳が早いらしい。

「それで、今日は随分と妙ちくりんな奴を連れてきたね。あんたのコレかい」

そう言っつて小指を立てるマイネルス。  
何だろう。世界が違っても、種族が違ってもおばちゃんはおばちゃんなんだなって思うよ。

「ち、違います！ 命の恩人です。私を助けてくれたんですよ」

「へえ。それで惚れたのかい」

マイネルスはニヤリと笑っていた。

このやり取りでアムが大体どういう立ち位置にいるのかがわかってくるな。

「チーがーいーまーす！ もう、からかわないてください。今日はキド様のギルドカードの発行に来たんです。キド様、外国人なので。それと、私のカードの再発行も……」

「ふふん、知ってるよ。サリーから話は聞いてる。アム、あんたよく命だけは助かったね。ほれ、再発行の書類やるから、さっさと行っておいで」

「はあい……それじゃ、キド様。またあとで」

バタバタと走って行くアムを見送りながら、俺は何となくマイネルスと視線を合わせる。「カードの再発行だけで済めばいいけどねえ」

そんな言葉を漏らしながら、マイネルスはぐふっと大きな鼻息を噴き出し、にこりと柔らかな笑みを見せてくれた。

「ほら、あんたもこつちきな」

手招きされるがまま、俺は受付の真ん前に立つ。

「サリーも言っていたが変わった服装だね。初めて見るよ」

「……あの人のことをご存じなのですか？」

「そりや上司だからね。なんだい、あんたうちの名物ギルドマスターを知らないのかい？」

「あいにく、別の大陸から来たもので」

「なるほど。そりや見えない顔だ。サリーはこのハーバリーのギルドマスターだよ」

ギルドマスターか。それなら俺をギルドに呼んだのも察しがつく。

「しかし、ほんとここいらじゃ見ない格好だね。ま、冒険者ってのは多かれ少なかれ変な連中の集まりさ。そして今日からあんたもその仲間入りだよ」

「よろしく願います」

「ん。ま、ちよつと待ちな」

彼女は水晶玉を取り出した。

「こいつに手を。そうするとあなたの生体パターンを読み取って、ギルドカードの出来上がり。簡単だろ。大昔の大賢者様<sup>けんじや</sup>が作った装置さ」

「なるほど。ハイテクだ」

言われるまま俺は水晶に手をかざす。

すると淡い光を放った後、水晶から一枚のカードが浮かび上がってきた。

金色の金属ともプラスチックともいえない不思議な材質のカードだった。

「冒険者ランクに説明は必要かい？」

「いや、ある程度は聞いている」

「そうかい。ま、一応マニュアル通りのことだけは言っとくが、ランクの上げ方は単純だ。仕事をこなし、貢献すればギルド本部がそれに応じてランクアップを認める。Bランクに

なるにはちよいと骨が折れるが、なれば一流だ。Aはもう雲の上さね。Sの方は気にしなさんな。あれは目指してなるようなもんじゃない」

マイネルスは何やら書類を書きながら説明を続けた。

「んじゃ、ここに記入して。このギルドカードはあんたの存在、身分を証明するカードだ。紛失、破損したらすぐに再発行するように」

マイネルスはそう言ってギルドカードの空白部分を指さしながら、羽根ペンのようなものを俺に手渡してくれた。それにはインクが付いていなかった。ただペン先の部分が小さく光っているのがわかった。

「名前を書けばいいのか？」

「ああ。別に、勝手に異名をつけても良いんだよ。名前を記入するのは方が一みたいなもの。既にギルドカードにあんたのデータはあるからね」

「そうか。なら……」

俺は漢字で「城戸音羽」と記入する。

そして残った空欄に「忍者」と記入した。

その字を見てマイネルスは訝しむような視線を向けてきた。

なので、俺は胸を張って答える。

「忍ぶ、者と書いて、忍者と読む。これが俺だ。忍者、城戸音羽が俺だ」

「忍者、ね。なんのこっちゃ知らんが、ま、いいさ。さて、最後の仕上げだ。これをやるまえに一つだけ忠告しとくよ、忍者」

「なにかな？」

「冒険者つてのは大体が荒くれ者の集まりだ。職にあぶれた連中も多い。血の気の塊みたいなのがうようよいる。当ギルドは冒険者同士の争いには関与しない。それがギルドに不利益をもたらさない限りはね。ま、因縁をつけられても自分でなんとかしろってことさね」

「その説明をするということは、最後の仕上げは何か面倒なことが起こるといことか？」

「そうなるね。それじゃカードを受け取りな。Bランク冒険者、キドー・オトワ」

マイネルスが差し出したギルドカードには俺のランクが既に刻印されていた。

何となくだが、それを伝える彼女の声はちよつと大きかった気がする。

俺がカードを受け取るうとした、その時だった。

「Bランクだど！」

「新入りがふざけてんのか、査定システムがおかしいんじゃねえのか！」

先ほど、俺に難癖を吹っつけてきた連中が立ち上がり、こちらへズカズカと大股でやって来る。

数は三。一人は巨漢の人間、左には鬼のような一本角を持った赤肌の男、右には鳥の頭と翼を持った男がいた。

「ギルドマスターにいくら払ったんだあ？ ええ？」

男たちは俺より身長が高い。俺を見下ろしながら、にやにやと笑みを浮かべ取り囲む。（いきなりこれか。わざとじゃないだろうな）

俺はちらりとマイネルスを見ると、彼女はウイंकをしていた。

（なんとかしてみせろってことか）

俺個人もビックリだが、いきなりのBランク。

そりゃあ、どこの馬の骨とも知らない奴がいきなり高いランクに名を連ねる。面白くもないだろう。

そんな馬鹿な話があるかと、こうして突っかかってくる連中がいても不思議ではない。正直、相手にするのが面倒くさいのはある。酔っ払いの絡み酒は前世だけで十分だ。

「おいおい、なんか言ったらどうなんだ？ それとも彼女に助けを求めめるかあ？」

言い返さないことに強気になったのか男たちはじりじりと俺に詰め寄る。

こういう手合いは相手にするだけ時間の無駄だと言うのがサラリーマン時代の結論だが、今回はそうもいかない。

Bランク相応の腕前を見せろってことなんだろう。

「どっちに賭ける？」

「下らねえ、こんなことに金なんざ使うかよ」

「そんなことより次の依頼に行こうぜ」

当然騒ぎは他の冒険者たちにも伝わるが、彼らは交ざるのではなく、ほぼ興味なしといった感じだ。どうせ、似たようなことは日常茶飯事なんだろう。

誰も止めはしないが、交ざりもしない。この辺りのサバサバした雰囲気は、まあ、嫌いじゃない。

「なんか言ったらどうなんだよお！」

さて、そろそろ俺に相手にされてないことに腹を立てた男はその剛腕を振るう。

その拳は間違はなく俺の姿を捉えただろうが、空振りをして、男は体勢を崩してしまう。その姿に周囲からは失笑が漏れるが、当の男たちからすれば何が起こったのかわからないことの方が大きいらしい。

「な、なんだ、殴っただろうが！」

「避けたんだよ。痛いのはごめんだからな。嫌だろ、痛いのに」

そう、俺は避けただけだ。奴らの目では追いつけない一瞬のスピードで体をひねっただけに過ぎない。奴らからすればまるで俺が霞のように見えただろうが、理屈としては単純なことだ。

「キエエエエ！」

「野郎！」

兄貴分が小馬鹿にされて怒ったのか鳥人間の方が奇声を上げ、鬼男の方もさらに顔を赤くしながら掴みかかってくる。

「うるさい！」

が、俺に触れるよりも前に二人は細い糸でがんじがらめにされ、空中へと吊り上げられる。

「忍法・蜘蛛糸縛り」

蜘蛛糸縛り。糸や縄などを使い、相手を拘束する忍法だ。俺は影の中にしまつてあつた縄を使い、奴らを縛り上げたというわけだ。

「て、テメエ！ 変な技使いやがって……！」

後に引けなくなった男は最後の意地と言わんばかりに再び俺につかみかかろうとするが、

俺はそれを無視して、マイネルスへと振り向いていた。

なぜなら奴はもう動けないからだ。

「な、なんだ、こりや……！」

男の影にはクナイが突き刺さっている。

影縫いだ。

「しばらくはそこで酔いを醒ますがいいさ」

すると、マイネルスが小さく拍手をする。

「さすがは、スキュラを討伐したっていう男だ」

マイネルスは今度はにやりと笑みを浮かべる。

「す、スキュラだと！」

影縫い中の男が驚愕の表情を浮かべた。

「馬鹿言うんじゃねえ！ スキュラはそう簡単に討伐できるもんじゃ……！」

「黙んな、素寒貧野郎が。あんたらが信じなくとも、こいつは当ギルドにスキュラの首を持つてきたんだよ。なんなら、ギルドマスター直々からお話してもしてもらおうかい？」

マイネルスの言葉に男のみならず、周囲の冒険者たちもざわつき始めた。

「スキュラを討伐だって？」

「あの男が……？」

「奇怪な技を使っていたが……まさか」

周囲からの注目が集まる中、マイネルスは念を押すようにさらに言葉を続ける。

それはある意味では俺の箔付けをしてきているようでもあった。

「この男はスキュラを討伐した。そいつあまざりもない事実。いかなる手段を講じたか、そんなのはギルドは詮索しない。ただ成果を出せば、ギルドは評価を下す。冒険者ギルドはその功績を認め、この男をBランク相当だと判断した」

マイネルスは俺の方を見て、再び笑みを浮かべる。

「珍しいことじゃあないさ。元軍人の冒険者ならこの手のことはよくある」

俺はマイネルスからカードを受けとる。

「ようこそ忍者キドー・オトワ。冒険者ギルドはあんたを歓迎する。よい冒険ライフを」

この瞬間。

俺は、真の意味でこの世界で生きていく、第一歩を踏み出した。

続きは、9月20日発売のファンタジア文庫で！

©Hutomaru Kanmitai, Cut 2019